The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	原発性胆汁性肝硬変症における肝表面像の診断的意義：特に早期症例における“Reddish patch”について
Author(s)	南，雄三
Citation	大阪大学，1983，博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/33588
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【46】

氏名・(本籍)	南(みなみ)　雄(ゆう)　三(ぞう)
学位の種類	医　学　博　士
学位記番号	第　5924　号
学位授与の日付	昭和58年3月3日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**原発性胆汁性肝硬変症における肝表面像の診断的意義** **—特に早期症例における''Reddish patch''について—**
論文審査委員	(主査) 教授 垂井清一郎 (副査) 教授 北村　旦　教授 木谷　照夫

論文内容の要旨

〔目　的〕

原発性胆汁性肝硬変症（以下PBC）の病変は，中等大胆管の障害に起因するとされ，診断的意義をもつ病理組織像としてchronic non-suppurative destructive cholangitis（CNSDC）が提唱されている。近年，血清アルカリフォスファターゼ活性や抗糸粒体抗体など種々の検査法の普及により，早期より診断，経過追跡されるPBC例が報告されるにつれ，PBCの肝病変は，その分布が不均一であり，胆管病変の進展も時相を異にすることが注目されている。従って，ＰＢＣの病期診断や病態進展機序の解明には，肝全体の変化を把握することが必要となる。従来より肝生検を併用した腹腔鏡検査は，肝の広範な病態の把握に有用な臨床検査法であるとして広く用いられている。

本研究では，継時的な腹腔鏡検査と肝生検により診断されたＰＢＣの腹腔鏡下肝表面像を検索し，ＰＢＣに特徴的な肝表面像と，その診断的意義について検討した。

〔方法ならびに成績〕

腹腔鏡下肝生検を含む諸検査によってＰＢＣと診断された12症例（男性２例，女性10例）を対象とした。

1）腹腔鏡下肝表面像の検討

ＰＢＣ12症例に施行された26回の腹腔鏡検査にて得られた肝表面像を，腹腔鏡写真のカラーフイルムを用いて検討し，ＰＢＣに特徴的な３種類の肝表面像を得た。即ち，① 直径約0.5～3cm大の不規則な大きさ，形と分布をもつ赤色斑状紋理（Reddish patch），② 網目様に連絡する傾向をもつ，淡い軟かな輪郭の白色紋理，③ 直径約0.5～3cm大の大きさをもつ，不規則かつなだらかな隆起性変化

である。Reddish patchは平滑な肝表面をもつ，より早期のPBCの肝病変に伴う肝表面像と考えられ，無症候性PBC例6例中，5例にみとめられた。白色紋理はPBC12例中11例に，隆起性変化は12例中9例に認められた。

無症候期より7年間，4回の腹腔鏡下肝表面像を追跡された症例において，平滑な肝表面にみとめられる白色紋理を伴うReddish patchは，その赤色調が減弱，白色紋理が増強し，Reddish patchを有する部位は白色紋理の侵入，拡大により細分化されるとともに，なだらかな隆起部に進展した。

2）肝表面像と組織像との対比

Reddish patchを有する無症候性 PBC 例（前述）にみられる主たる肝表面像の変化は Reddish patchから白色紋理，さらに隆起性変化への順に進展するものと考え，PBC 12症例において観察された26回の腹腔鏡下肝表面像を，これら3種類の表面像の組合せにより継時的に5段階に分類し，38生検標本についてScheuer分類による組織学的病期との対比を試みた。その結果，肝表面像の継時的変化は対応する生検各標本の組織学的病期と比較的よい対応を示した。

3）腹腔鏡下肝表面像のもつＰＢＣにおける病態的意義

腹腔鏡下に観察される肝表面像，特に早期PBCの平滑な肝表面にみられるReddish patchのもつ意義を検索する目的で各生検標本に組織学的検討を加え，各門脈域における胆管数ならびに動脈，門脈数を測定した。慢性肝炎，肝外胆管障害例や，正常域対照例に比し，ＰＢＣでは各門脈域あたりの胆管数，ならびに全門脈域に対する胆管を有する門脈域数は著明に減少していた。又，Reddish patchを有する症例はpatchをもたない症例に比し，より多くの胆管を残していた。さらにReddish patchを示す部位は，patchをもたない部位に比し胆管の消失はより軽い傾向を示した。ＰＢＣの本態が胆管の破壊，消失によって進展することを考え合せると，Reddish patchを有する部分はpatchをもたない部分に比してＰＢＣの病態の進展がより軽微な部位に相当すると考えられた。

〔総　　括〕

PBCにおける，Reddish patch，白色紋理，隆起性変化の3種類の特徴的な肝表面像はその病期診断に有用であることが示された。特に，早期PBC例の肝表面にみられたReddish patch はPBCの新しい肝表面像であり，Reddish patchをもつ部位は，patchをもたない部位に比し胆管の病変の軽微な区域に一致することが示唆された。この不規則な大きさ，形の分布をもつReddish patchは，segmentalな分布と進展をとる胆管病変に特徴づけられるPBCの病態を反映する特徴的な肝表面像で，診断的にも有用であると考えられる。

論文の審査結果の要旨

原発性胆汁性肝硬変症（PBC）における肝病変は同一肝内での分布の時相が不均一であり，PBCの診断と病態解析には，肝全体の変化を把握することが必要とされる。

本研究は，肝の広範な部位の病態の把握に有用とされる腹腔鏡検査に肝生検を併用しＰＢＣ症例の

肝表面所見を詳細かつ継時的に観察しＰＢＣの診断と病期判定に有用な３種の特徴的な肝表面像をはじめてとらえた。同時に得られた生検肝組織を肝表面との対応において検討を加え，これを支持することを示した。特に病初期例の平滑な肝表面に既に認められる大赤色斑状紋理（Reddish patch）は早期PBCに特徴的な肝表面像であり，直径約0.5～３cmの大きさの不規則な形と分布を示した。胆管病変を指標として組織学的検討を試みた結果，肝表面にReddish patchをもつ部位は肝内胆管をより多く残存させており，肝病変の進展の軽微な部分に相当することが示唆された。Reddish patchを視診下に確認することは，PBCの早期診断に有用であり，Reddish patchを中心とした肝表面像の継時的観察は，PBCの病期診断に有力な手段となる。こうした結論に至った本研究はPBCの臨床的研究に資するものと考える。